

## 松村月溪（呉春）(その一～その八)

### (その一)

松村月溪（後の呉春）が蕪村に弟子入りした経緯はよくわかりませんが、蕪村の漢画の腕に期待して入門したのではと思います。当時の蕪村の漢画の腕はかなり評判で、村瀬栲亭という江戸時代の儒学者が

「謝寅・・・・其妙近代漢画得其神韻者寅為第一矣」

つまり「蕪村の漢画の神韻は一番だ」との内容を書いています。

### (その二)

在野人様のメールのように月溪の師・大西酔月からアプローチするのも大切と思います。また、島原の太夫・「難路」は実在していた人です。月溪と恋仲になり身請けされ正式に結婚して僅か一年にも満たない同棲生活の中、不慮の事故（藪入りの里帰りの時に船が破船）で溺死しています。この難路の俳句を手ほどきしたのは、太祇です。太祇は蕪村の親友ですからこの点も非常に面白いと思います。

### (その三)

#### 参考 若き月溪の師の系図からのアプローチ

蕪村に弟子入りする以前、月溪は大西酔月に画を学んでいます。月溪の雅号は大西酔月の「月」と蕪村の本名の溪口（又は溪）の「溪」の字をとったものと一般に言われております。

月溪は通称・松村嘉右衛門・名は春、月溪・呉春の雅号の他にも伯望・允伯・存白と号したそうです。

月溪の師・大西酔月は系図においては望月氏系図の画家に位置いたします。

望月玉蟾 —望月誠斎（玉蟾の子）—望月玉仙—望月玉川—望月玉泉 大西酔月

●大西酔月—月溪の師

「大西酔月八望月玉蟾ノ門人ナリ後元明ノ古法ヲ学テ遂ニ一家ヲ成ス宝暦頃」

と書いてあります。— 『本朝 画家人名辞書』（発行者・大倉保五郎・明治 36 年版）

●望月玉蟾（ぎょくせん）—大西酔月の師

大西酔月の師・望月玉蟾については以下のような記述があります。

「...玉蟾平安ノ人初土佐光成ニ学ヒ後雪溪ヲ師トス又参スルニ狩野元信ヲ慕フ既ニ一家ヲ成ス、後池大雅ト交友ナリ 画格又一変シテ漢画ヲ創為シ益妙ナリ宝暦五年（1755年）八月三日没ス」 『扶桑画人伝・卷之四』（発行人・坂昌員・明治 21 年再版）より

以上の記述を参考に致しますと、月溪が蕪村に入門する前の師・大西酔月は中国の元明の画法に学び一家を成した人であり、またその酔月の師・望月玉蟾も狩野派から画格を一変して漢画を描いた画家です。在野人様のメールですと、「玉蟾は北宗派であつて後に南宗を参したもの」との情報、大変貴重と思います。そうした流れの月溪も当然中国の漢画を勉強していたと思われます。

余談になりますが、望月玉蟾が交友としたと言う池大雅は、祇園南海から絵を習っ

たと言われています。南海はいち早く中国南画を紹介した人物で有名です。京都でもう一人中国南画を紹介した画家がいます。蕪村が私淑したといわれている彭百川（さかきひやくせん）です。百川が亡くなったのは宝暦三年八月ですので、その二年後に玉蟾が没したことになります。百川と玉蟾やまた酔月との間に交流があったかどうか分かりませんが、当時の京都では百川はかなり有名であったそうで、『南画史要』（梅澤和軒著・大正11年発行）にも「百川が一窓花鳥王維画と、乙にすまして気取っただけに、当時の平安ではやや専門的に描いたので、名声も揚り、門下に従遊したのものもあつたらうが・・・」と書かれています。

中国から南画が日本に紹介された初期に、同じ京都いた彼等に交流があったと見るほうが自然と考えます。当時の流行した漢画ブームの盛り上がりの中で、お互いに情報交換したり画譜を貸し借りしたり、何らかの繋がりがあつたのは当然ではないかと考えます。

百川や玉蟾が亡くなった宝暦以降においても、蕪村は池大雅や円山応挙と親しく付き合っていますので・・・・・・。

また大西酔月の項目に「宝暦頃」とありますので、宝暦年間（1751～1763年）に活躍した人物か、または宝暦の頃に没したとの意味と思います。蕪村に弟子入りしたのはその後ですので、酔月が亡くなったので、漢画に優れた蕪村に弟子入りしたとも考えられます。でも、本当に何故に蕪村を師に選んだのでしょうか？

「大西酔月の師・望月玉蟾が池大雅と交友」との記述が本当でしたら、池大雅に弟子入りする可能性も十分考えられますので・・・。きっと何か蕪村と月溪を結びつける人間関係があつたと推察されます。ところで百川が刻したという、「一窓花鳥王維画」の王維とは、唐時代の詩人でまた、画家であつた王維（王維詰）のことです。王維は「画の中に詩があり、詩の中に画がある」といわれた中国南画の元祖と言われた人物であり、蕪村が敬愛した画家です。

#### （その四）

月溪の「蕪村入門」についての参考資料があります。村瀬栲亭という儒学者が「呉春の追悼」を残している碑文です。村瀬栲亭はもとは秋田候に仕えた儒学者で、京都に来てからは蕪村とも呉春とも直接面識があつたとの事です。「蕪村と呉春の関係」を知る上でも貴重な資料だと思いますので、碑文の一部を抜粋して紹介致します。

#### 参考 村瀬栲亭の書いた碑文から

「...圓應拳善画人物花卉合羽毛麗艶生動名馳天下旧弊為之一洗  
謝寅則宗大癡石田兼学吳偉張路曲盡其妙近代漢画得  
其神韻者寅為第一矣月溪初学謝寅已入其室寅嘗語余  
春也人物不婢吳淋花鳥唐突林良晚圓謝二家之長自為一家...」

つまり、「謝寅（蕪村の晩年の雅号）は大癡・石田を手本にし、また吳偉・張路の画を学び、近代漢画（当時の中国画）を学び尽くして、その神韻は蕪村は第一である。」と書いているのです。また、月溪が蕪村の門にあつた時、蕪村が村瀬栲亭に直接語つたそうです。

「春（月溪の名・呉春の略）の人物画は呉淋に婢からず、花鳥画は林良にはるかに越えている」と……。そして呉春は「晩年に応挙と蕪村の長所を受継ぎ一家を成した」と書かれてあります。

蕪村と直接面識があった人物が、「蕪村の漢画の神韻はナンバーワンである」、本当にこのような文章に触れますと、蕪村ファンの私は非常に嬉しくなります。南画の世界では写生より写意を主とし気韻生動を非常重んじているので、神韻のある蕪村の漢画は当時から高い評価がされていた事が明らかにしています。村瀬栲亭の文章の中にある蕪村が宗とした、

- 「大癡」は「黄公望」（1269～1355年・元時代）の号です。字は子久です。
- 「石田」は「沈周」（1427～1509年・明時代）の号です。字は啓南、白石翁です。

上記の二人は言うまでもない中国南画の大家です。中国絵画の二大潮流の中で、写意（情感や心の表現）を重んじる南画の流れの、その正統派に属する偉大な文人画家です。

また、蕪村が上記の二人と兼ねて学んだという、

- 「呉偉」は明時代の略筆画に優れた画家です。号は小仙。江夏派の創始者で、山水は落筆壮健で白描に尤も優れ、人物画は唐時代の草画の大家「呉道子」風だそうです。
- 「張路」の字を天馳で明時代の画家です。平山と号し、上記の江夏派に属し「呉偉」の作風に学んだと言われています。

この呉偉と張路は、黄公望や沈周の大物に比べればはるかに評価の低い画家たちです。元時代の「復古主義の形式化」、その鬱憤を「放逸な気風」（逸気）で反発した浙派のその影響を受けた江夏派の画家です。

彼等は南画の正統派でなく、一般に北宗流や院体画の線描写実を重んじる潮流に位置付けられているようです。中国では、「純粹の文人画家」とそうでない「職業する工人画家」とはっきり区別されよう、その点からは呉偉も張路も後者に入れられているようです。

彼らの評価が低いのもそのような理由があるとも考えられます。

参考までに蕪村が「野馬図」で模写した沈南蘋も北宗流の写実主義（理を重んじる）の流れに属します。

在野人様のメールで「北宗流」という言葉に触れていましたのを見て、村瀬栲亭が意識的にか偶然にかわかりませんが、「大癡・石田」と「呉偉・張路」を分けて記述している事を気が付きました。これも考えると何かあるような気が致しますが、ますます広がってお手上げ状態になりますので……………

蕪村が月溪を讃えた言葉「春（月溪のこと）也人物不婢呉淋花鳥唐突林良」と引き合いにだした中国の画家も以前に調べてありましたのでコピーしました。

- 「呉淋」—明の画家で

「……万曆ノ時宮中書舎人タリ山水ヲ善クシ布置絶ヘテ古ヲ摹サス皆真景ニ対して描写ス故ニ小勢最モ奇トナ ス一時觀ルモノ驚カサルナシ大士ノ像ヲ能クシ亦人物ヲ能クス」

『支那画家人名辞書』(発行所・大倉店書 明治41年発行)より

●「林良」—明の画家、「字八以善広東ノ人着色花果合羽毛ヲ画ク極メテ精麗ナレトモ未タ板刻ヲ免レス又水墨ノ禽獸樹木ヲ寫シテハ筆勢極メテ遒勁草書ヲ作ルカ如シ而シテ俗氣ヲ脱ス」 『支那画家人名辞書』(発行所・大倉店書 明治41年発行)より

私は蕪村あつての呉春と思っています。呉春が蕪村亡き後、円山応挙の門を叩いた折に、応挙から「弟子ではなく、友して一緒にやりましょう」と言われた理由も、蕪村から「月溪の並優れた才能」を聞かされていたからと思います。

### (その五)

>小説の一節だから何処までが事実か分からないが参考には成ります。又追々呉春の事、蕪村の事を教えて下さい。

在野人様の紹介した小説は事実の裏づけがあると思います。呉春の最初の妻の「雛路」の實在は本当みたいです。本名は植田はる だそうです。「松村家略図」の春(月溪)の妻として書かれてある名前です。又松村家の旦那寺・京都の明福寺の過去帖には、松村文蔵(月溪のこと)の妻として「清遊」の戒名が記され、天明元年三月晦日に亡くなったことがわかります。その書き入れに「俗名遊君雛路」との記録が残っています。雛路の本名が「はる」とすると、春がはるを娶った事になり、偶然でしょうか面白いです。

「遊君雛路」と言われたように、「雛路」は島原の太夫の時に名乗った源氏名です。

- 宝引や山鳥の尾のしだり尾を ひな路 『不夜庵春帖』(明和7年)
- はご板の糸にしめでたき光かな ひな路 太祇の『歳旦帖』(明和8年)

などの句も記録に残っています。雛路は高級遊女の嗜みとして俳句も造ったのでは・・・と思います。その師は蕪村の親友・太祇です。このことは、『蕪村と俳画』の著者・岡田利兵衛氏が詳しく書いております。

また、『蕪村と俳画』の「月溪(呉春)伝余説」の章では、以下のような記録も紹介しています。

「松村月溪は、本其家は京都金座の手代にて有しが、島原の長妓ヒナジナルモノにこられ、これを受得妻としけるが妓本播磨の者にて本国へヤブイリしが、折悪く破船にて溺死せり、是より又妻と云うものも定めて不持。切家敗落に及びて撰津の池田村(クレハノサト)に逃出し、剃髪して呉氏を称し、帰京して大二鳴ル。嘗妙法院王府の臣となれにき。老に及びて髪を不削、指甲を不切、帯もぐるぐるまきにて、昼夜同衣にて湯にも不入奇状也。後妻のごとくせられしは大阪の者にて、梅と称し俳諧も出来るこむずかしき女にて、木屋町に仮居せしを、月溪娶られけり。切格別の大酒にてもなけれ共、事気になりて不寝まま、梅をして何時となく酒を調ぜしめしとなん」とあります。

これは「横山清暉」が書いたもので、清暉は若い頃に月溪の宅へ行ったことがあるそうで、その彼の物語として書き留めた文章だそうです。京都に戻り大成功をおさめた呉春も晩年はやる気を失い、だらしない生活を送っていたようです。

そうした呉春に連れ添い支えた「俳諧も出来る小難しき女」と書かれている大阪の梅と

云う女性は、蕪村門の女流俳人「うめ女」(正式・みち子)のことで、雛路と同様「うめ女」も遊女で大阪新地の芸妓、呉春より一歳年上の才女です。二回も芸妓を身請けして妻にしているのですから、呉春はとてもお金持ちだったと思われます。呉春は新婚で僅かな同棲生活を送っただけで事故死した先妻・「雛路」を慕うその気持を引きずっていた様子ですので、月溪を支えた梅はきっと気丈で心の広い女性だったのでは?・・・と想像されます。岡田利兵衛氏の調査では「うめ女」は後妻として松村家に正式に入籍していたそうです。当時、芸妓あがりの者を、しかも妾ではなく正妻として後妻に迎えられる事はとても珍しいのでは?・・・と私は思います。きっと呉春と梅の間には、言葉に出さなくても分かり合える信頼と思いあった違いありません。その中には師・蕪村を慕う沢山の思い出もあったと思います。文化7年、「うめ女」が60歳の亡くなってから8カ月後、文化8年7月も呉春も60歳で梅の後を追うように他界しています。

#### (その六)

参考 弟子入りには紹介人がいたのでは?

弟子入りした若き月溪の才能を蕪村は書簡で「此児輩、画には天授之才有之、終には牛耳を握るおのこ末たのもしく候」(近藤求馬宛ての書簡)と紹介しています。

月溪は蕪村と同様に若い時から絵が学んでいたようで、青年時にはその天才ぶりを既に発揮していました。蕪村にはもう一人絵の天才といわれた弟子がいます。紀梅亭です。蕪村の「画の門人」の中で、月溪と梅亭は東西の横綱といわれていたそうです。梅亭の弟子入りの経緯にははっきりした記述が残っています。

「紀梅亭は時敏九老ト号ス初メ若城藍田ノ僕タリ天性画オアリ藍田因テ蕪村ニ請フテ画ヲ習ワシム遂ニ其法ヲ得テ一家ヲ成シ」-『本朝 画家人名辞書』より

月溪と梅亭の蕪村入門が語るものは、天才の若い才能を蕪村が指導するに足る力量があったことであり、それが当時において知られていた事を意味しています。

梅亭の主人という若城藍田について調べてみましたが分かりませんでした。京都まで家来を勉強させられるほどの経済的にも社会的にも上流階層にいる人と思われます。

梅亭の弟子入りの経緯を考えると、月溪もその才能を伸ばすために誰かが推薦して蕪村に頼んだ可能性もあります。yahantei様は月溪の父筋と考えているようですね。

呉春の父も当時の上流武士でした。松村家は代々幕府の金貨鑄造所の金座の役人の家系で、金を扱う座人の採用資格は相当厳しかったそうです。その中で呉春の父は京都金座の年寄役(総責任者=ナンバーワン)を勤め、呉春自身も平役(鑄造工場の監督役)をしていたと言われています。つまり呉春はyahantei様の資料が通りに当時の超エリート階級の息子です。花柳界に出入りして浮名を流せたのも彼が経済的にも社会的にも恵まれた環境にいたことを物語っています。そして蕪村の弟子たちの多くも富裕な階層の人物ですので、その中の誰かが蕪村に月溪を紹介したとも十分考えられます。

当時の京都において、蕪村の描く漢画は生気を失った狩野派の絵画に比べ新鮮で魅力あるものと受け止められたに違いありません。また其角の江戸座の流れをくむ蕪村の俳句も「芭

風復興運動」の新しい息吹に満ちた「最先端を行く流行に位置していた文芸」と京都の文化人には受け止められたことでしょう・・・

若い月溪が蕪村の弟子になる動機付けも、この新しい息吹にも多分に影響されているのでは・・・とも思ったり致します。

### (その七)

皆様も御承知のように蕪村の臨終に立ち会ったのは呉春です。蕪村は生涯最後の三句

- 冬鶯むかし王維が垣根哉
- うぐひすや何ごそつかす藪の霜

この二句を唱えて、暫く時間を置いて

- しら梅に明るる夜ばかりとなりけり

蕪村は生涯最後の三句の俳句を呉春に書取らせ永眠致しました。この句は表向きは情景句ですが、その裏には蕪村の呉春に対するいたわりと励ましが隠されているのでは・・・と思っています。暖かい情感に溢れるこの句に私は心底から感動をおぼえます。

以前から考えていたテーマですが、皆様にも考えて頂きたいと思っています。

そのキーワードとなる言葉は「王維」と「鶯」と「白梅」と思います。そして呉春はその時は精神的などん底から「画師としての再出発」になる池田での隠居生活のさなかに蕪村の看病と為に呼び戻されていた事を考慮して私はそのように思うのです。

この句をどう感じ、そしてどう思うか皆様のご意見をうかがいたいと思います。

キーワードについて簡単に説明を添えます。

- 王維について、

? 蕪村が終始敬愛した中国の天才的画家・南画の祖を言われている事。

? 王維も心に大きな挫折を味わった芸術家である事

? 隠遁生活のような「もう川荘」時代に素晴らしい詩など多くの作品が生まれている事

? 王維は禅の熱心な信仰者で、その字名は「無言の行」で有名な維摩詰に因んでいる事

- 鶯について

? 鶯の初音は「いち早く春の到来を告げるので万人に愛される鳥」として当時の人に認識されていた事

江戸時代の啓蒙書に鶯を「春の告げ万人に愛される」善の象徴、鼠は悪の象徴として書かれている事

? 呉春も春と呼ばれていた事、また愛妻の名も「はる」である事

? 鶯の「霜の藪」の中では鳴けない事・鶯の笛鳴きは「ジャジャ」としか鳴けない事

? 「梅に鶯」は初春のシンボルと言えます。梅に枝で「ホーホケキョ」と鳴いて春を告げます。

- 白梅について

? 梅の花は「厳冬の雪を割っていち早く芳香を放ち春を告げる」ので古来中国でも勇気・剛毅の象徴・四君子の一つとして文人に愛された花である事

? 「白梅に」は「白むめの」と書かれてある記録もあるとおり「白む」は「夜が白む」との掛詞である事。

? 梅に鶯は初春の風景である事

蕪村が没してから七十七日が経ち、門人や緒家から寄せられた追善集『から檜葉』の中で呉春は月溪の名で蕪村を追善する句を載せています。

● 明六ツと吼えて氷るや鐘の声

この句には月溪の前書きが付いています。

「師翁、白梅の一章を吟じ両目を閉、今ぞ世を辞すべき時也、夜はまだ深きや、ととあるに、万行に涙を払ふて」 との前書きです。

呉春は万行の涙を払い、夜明けの時刻である「明六ツ」を吼えたのです。「吼える」という表現は臨場感をもって実に痛いほど心を突き刺す響きがあります。呉春が言葉が出せない程に大泣きし、気合を入れて必死で声を絞った状況が見えてきます。何故に、呉春はどのように万行の涙を流したのでしょうか？

敬愛する師の最後を悟ったからでしょうか？

しかし記述によると、腹痛に悩まされ続けた蕪村の様態は、その日は穏やかであったと書いてあります。

「今ぞ世を辞すべき時也、夜はまだ深きや」との蕪村の問いに、「涙を払いて」とあるので、もうこの時点で既に泣きじゃくりの状態を記しています。

このように考えると、呉春の男泣きは、蕪村の辞世の句となった「白梅の句」と前の二句に原因があることとなります。

それにこの場面状況には矛盾があります。

「白梅の句」で夜が明けたと詠みながら、なぜ呉春に「夜はまだ深きや」と聞いたのでしょうか？

これは蕪村の句が写生句の形は外見で、実は実景ではない写意の句である証拠と思います。

その蕪村の情感やその心に触れて、呉春は万行に涙に咽んだのでは・・・と思うのですが、皆様はどのように感じ、蕪村の心をどのように解釈いたしますか？

### (その八)

>ご存じのように池大雅、与謝蕪村等は文人画とか南画（南宋画）とか呼ばれる

>反主流の絵を描いていました。呉春は蕪村に付き絵と俳諧を学び、蕪村死後蕪村

>とは対極にある応挙の門を叩きます。当時の人は之を「金の為に転んだ」と噂を

>したそうです。応挙は呉春を門弟としては迎えず、友人の様に扱ったそうです。

呉春が「金の為に転んだ」とのそうした噂があったのは事実かも知れません。妙法院門主真仁法親王のサロンに出入りするほど京都で名声は上げたのですからやっかみを含めて俗っぽい噂が立つのも十分考えられます。蕪村の場合も同じです。蕪村の死後、生前にも増して蕪村の絵が非常に高値になったそうです。そんな中で「父祖の家産を破敗し、身を

洒々落々の域において、神仏聖賢の教えに遠ざかり、名をうりて俗を引く逸民なり」(田宮仲宣の記述)と悪口を述べる人物もいた訳ですから・・・

蕪村は確かに芝居好きで、富裕なパトロンと一緒に茶屋遊びをしています。そのように非難されても致し方がない面も蕪村にはありますが、しかし、その遊びに溺れるようなタイプではなく、磊落で明るい性格が却って可愛いくらいです。彼のコアには脱俗的な道徳観がきっちり納まっており、小気味良いほど真直ぐ筋が通っていて、そのことは蕪村が弟子達と交わした書簡の内容を見るとよく解ります。また、彼は一流と言われた儒学者とも親しい交遊があり、その中でも彼の評判は頗る高いのです。親しく交わって交流した人から良く言われる蕪村は、やはり凄い良い人であったと思います。蕪村の「離俗論」はあまりにも有名ですが、蕪村の生き方そのものが懐が深く「俗を持って俗を越える」ものだったのでは?? 思えてなりません。

呉春の事に戻りますが、世間の噂よりも、真面目な人柄の円山応挙が弟子でなく友人として扱った事実の方がずっと見逃せない真実を物語っていると思います。私も円山応挙の事を少し調べて、ビックリしたことがあります。彼が勉強した中国の画家達は蕪村が勉強した画家達とは重なっている部分が多いのです。黄子久(黄公望)、文徵明、張平山、林良、沈桤(沈南蘋)などは蕪村も真摯に勉強しているのです。

また『中国絵画史辞典』(王伯敏著)の中に面白い記述があります。明代の写意花鳥画は、優美さを尊び「士気」を強調して文人画の範疇に属していたとの事です。また山川武氏も「応挙に画号も中国南宋画の銭選(舜举)の作風を慕いそれ故に応挙とした」言っています。この銭選の画風を学び、日本に紹介した初めての人物は日本南画の先駆者・祇園南海です。銭選は山水画にも非常に優れていましたが、花木画は非常に精巧細微で、花鳥画も巧麗に描いた画家です。晩年は写意花鳥画の移行したそうですが、宋が滅びた後は決して元朝に仕えなかった人物だそうです。

応挙の写生画は西洋的な写生(遠近法など)に影響されながらも、基本は東洋的な花鳥写生画をベースにしている事はこの銭選からの命名でも分かります。このような事柄を念頭に入ると「文人画(南画)」と「花鳥画」との区別の一線が実に曖昧になります。呉春が文人画から花鳥画へ移行した事は事実ですが、それを「寝返り」、「転び」と決め付けるのは、更に調査を進め再検討してから結論を出す事ではないかと思います。勿論、応挙も呉春も職業画家ですから、生活の為に「お金を稼ぐ」ことは前提です。しかし、それを「お金の為に転向した」とする見解になると、私は賛同できません。

> 呉春が應挙の門に赴いたのは、應挙に説破されて『足下の文人画寔に佳  
>であるが、勅命によつて畫くものは、文人画では採用されない』と言はれた  
>ので、その翌日から舊習を破って應挙風になつたと傳へられるが、この一事  
>をもつて見ると、呉春が改宗の理由は、御用絵師たらんとしたの軽薄な意思  
>であるが、

蕪村が若き弟子・呉春を林良より優れているの高く評価していますが、林良は明代前期の写意派に属す宮廷花鳥画の第一人者です。つまり中国の御用絵師の画を蕪村の弟子時代に学び、それを越える腕であると蕪村は褒め称えております。そのような呉春を「旧習を破って応挙の花鳥画に走った」との評価は実に一面的で、片手落ちのような気が致します。そのような人の方が、軽薄とは言えないのでしょうか？

色々調べて確信を持った時にしか、人の悪口は言うてはならないと思います。

先ずはよく絵を見ること、よく調べる事が大切だと私は思うのです。私も呉春の画を円山見ている訳ではありませんが、呉春の作品に「柳鷺群禽図屏風」があります。本当に写意の溢れる名作です。蕪村の「楊柳青々一路寒山図」が下地になっている作品である事は一目で解ります。蕪村のこの屏風には王維の詩「落花寂々啼山鳥 楊柳青々渡水人」の後半の句が書き込まれています。間違いなく呉春に影響を与えた事は十分に納得できる情感と写意に富んだ作品です。呉春が応挙風の写生花鳥画の作風を取り入れた話でしたら応挙に媚を売ったと誤解されても致し方がない面もありますが、呉春の作風が写意性が強い花鳥画と言われています。円山派とは少し趣が違う独自の四条派を築き事も納得が行きます。

では、何故に文人画（山水画）から離れたのでしょうか？ 蕪村が死んで教えを請う身近の人が円山応挙だったのでしょう。几董が死んでから呉春は俳画もやめたようです。月溪は蕪村の同じように文人画（山水画とします）、花鳥画 人物画、俳画と幅広く上手に描けた人物です。その中で花鳥画は蕪村から林良と比較され褒められ大いに自信を持ったとも考えられます。金座の役人の退職して、趣味を生かして職業画家を目指す場合には、たぶん人は得意のものを前面に押し出すと思うのです。應挙に「足下の文人画寔に佳であるが、勅命によつて畫くものは、文人画では採用されない」と言われたとしても、それは應挙が蕪村から呉春の得意分野である花鳥画の事を聞いていて、呉春に期待し今後の生活を考えた厚意の誘いだったのかも知れません。「翌日から旧習を破って応挙風の絵」がすぐに描ける呉春との記述が実際本当でしたら、それは呉春が既に花鳥画の心得があり、それもかなり熟達した腕であった事を物語っていると思います。「改宗」との表現はA→Bですが、呉春の場合は最初からAもBもCもあり、その中でBを選択したと言うのが本当ではないでしょうか？

そう考えると呉春を友として扱った応挙も立派ですが、応挙にそうさせた呉春も立派な腕を持っていたとの見方ができます。そして彼を育てた蕪村も立派と思うのです。何でもお金の打算勘定や偏見を持って見てしまうと、その影に見落としてしまう事柄も多々あるのではないかと心配になります。色々な解釈や見方がありと参考にして頂ければ幸いです。私も実際の事は良くわかりませんが、蕪村や呉春や応挙の絵が見て直感的に彼等が絵の大家であることは解ります。彼等を支えた精神も、そんなに俗っぽい計算人間のものとはどうしても思えないのです。